

かもと稲田支援学校 令和7年度(2025年度)学校評価表

1 学校教育目標
地域や家庭と連携しながら児童生徒一人一人に応じた教育活動を実践することで、児童生徒が自分に自信を持ち、夢に向かって挑戦する力や地域社会の中で生きていく力を育む。

2 本年度の重点目標
<p>(1) 命と人権を守る教育環境づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒が安心して学び、生活できる教育環境の整備(危機管理体制の確立、健康・安全教育の充実) ○「道徳」の授業をはじめ全ての教育活動における相手を思いやる豊かな心の育成と人権教育の充実 <p>(2) 学ぶ楽しさ、わかる喜びを実感できる授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の適切な実態把握に基づく授業の工夫とPDCAサイクルに基づいた授業改善による生活に結びついた確かな学力の定着 ○自立活動の充実と積極的なICT活用等による学習支援の工夫 <p>(3) 地域に根差したキャリア教育と地域と協働した教育活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○発達段階に応じた計画的なキャリア教育と将来の「地域で働く・暮らす」を支える取組の推進 ○地域の自然・文化を生かした活動、地域貢献活動の更なる充実を通じた健やかな心と体の育成 <p>(4) センターの機能を生かした地域の特別支援教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ○交流及び共同学習の一層の推進 ○学校公開等を通じた特別支援教育に関する情報の積極的発信 ○幼児教育施設や小・中・高等学校への研修会等を通じた地域の子供たちへの支援の充実 <p>(5) 教職員のウェルビーイングを推進する職場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○心理的安全性が高く互いに高め合える職場環境の実現 ○校務の精選・効率化、DX化等による働き方改革の推進

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	校訓に沿った取組の具現化	・校訓に沿った目標設定や実践に取り組むことができたか。	・職員が本年度の重点目標を高く意識し、学校評価項目の具体的目標を実践し、「かも稲スタンダード」が確立できる。	・本年度の重点目標を職員会議等で明確に示す。 ・学期ごとに学校評価項目の進捗状況を整理し、改善点を明確にしたうえで取組を実践する。	B	本年度の重点目標を基に具体的目標に向けて取り組み、学期ごとに進捗状況・改善点を明確にしたことで取組の推進につながった。
	業務改善	・全職員で業務改善を進めることができたか。	・全職員による業務の改善に取り組む。 ・「かも稲ワークガイド」の活用により、円滑な業務遂行につなげる。	・全職員から業務改善アイデアを募集し、実施可能なことから改善を図る。 「かも稲ワークガイド」の更新と共にDX化を図り、更なる活用を図る。	A	全職員による業務改善アンケート結果を基に15項目の業務改善・効率化を行った。更新したワークガイドを含め、校務のDX化を図り、業務の効率化を図った。
	働き方改革の推進	・時間外勤務時間の短縮を意識した計画的な業務遂行ができたか。	・職員の超過勤務時間について、昨年度の月平均約27.5時間を25時間台まで削減する。	・毎月の衛生委員会で時間外勤務状況の要因と業務の平準化等について協議し、全職員に周知して改善を図る。	B	時間外勤務の短縮を意識して業務を遂行し、超過勤務時間はほぼ昨年度同様であった。次年度は、今年度検討

				<ul style="list-style-type: none"> ・ 定時退勤日の徹底を図る。 		<p>した業務改善策を実行し、更なる時間外勤務時間の縮減を行う必要がある。</p>
安全・安全な教育環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒が安全に安心して学校生活を送れるような環境整備や、自ら安全を確保しようとする防災・安全教育ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 危機管理マニュアルや教職員初動マニュアルに沿った危機管理体制を迅速に構築し、安全な対応ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現在の美しい学校環境を維持しつつ、衛生的で安全安心な教育環境を保つことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員初動マニュアルを年度当初に職員に配付し、マニュアルに沿った訓練を年に6回実施する。 ・ 訓練の際には、各学級で事前学習・事後学習を実施し、児童生徒が「なぜ訓練を行うのか」「自分の命をどう守るか」を理解し、考える機会を設ける。 ・ 定期的な環境美化作業や、日常的な校内清掃を計画する。また、児童生徒が事故等に至る前に早期発見・早期対応ができるよう、毎月の安全点検やヒヤリハットメモの集約を行う。 	B	<p>年度当初にマニュアルを職員に配付し、各校舎において6回以上の危機管理に関する訓練を実施することができた。訓練後には反省アンケートを実施し、その結果を基に各マニュアルの加筆・修正を行い、職員へ周知することができた。児童生徒と取り組む日常的な清掃を基本としながら、定期的に職員清掃・職員作業を計画的に実施することができた。また、安全点検等で発見された不具合箇所については、事務部と連携し速やかに対応したことで、衛生的で安全安心な教育環境を維持することができた。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒が主体的に心身の健康について考えられる健康教育ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 健康の基礎、体づくりに関して、系統的な指導・支援のもと、児童生徒が主体的に楽しく体を動かす機会を増やす。また、個別指導の充実を図る。 ・ 歯と口の健康の指導を通し、児童生徒自らが主体的に自分の健康を考え、行動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ かもいなふれあいの日に楽しく「ちょこスポ」で体を動かすとともに、「体じゅう実WEEK」を年3回実施し、運動の習慣化のきっかけづくりとする。 ・ 自分の健康づくりのため、保健委員会と協力しながら、長期休業中の過ごし方シート等も活用し歯科保健指導を実施する。 	A	<p>かもいなふれあいの日のちょこスポ等は定着した。また、「体じゅう実WEEK」を3回実施でき、クラスでの表彰も児童生徒の意欲の向上、隙間時間を活用した運動の日常化・習慣化のきっかけづくりになった。今後は、運動習慣の定着を図っていく。かもいなふれあいの日で生徒保健委員が主体的に歯の健康づくりの取組を実施できた。また、長期休みの過ごし方シートも各学部で工夫して実施できた。</p>	

授業の充実	カリキュラムマネジメントの推進	<ul style="list-style-type: none"> 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指し、授業の質を高めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の実情に応じて3つの資質・能力の育成を目指した授業づくりのための方策を検討し、研究部と連携しながら授業改善に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業づくりの視点を共有し、各学部の授業研究会等で活用できるようにする。 3つの資質・能力の育成を意識した授業づくりに向け、各学部の実情に応じた単元計画・単元評価等の様式を活用する。 	B <p>文科省が作成する授業改善の視点一覧を学部研のシートに入れ込んだことで授業づくりの視点を意識しながら研究授業に取り組むことができた。</p> <p>単元の目標を共有したり、子どもの学びの様子を共有するためのスプレッドシートを活用したりして、各学部の実態に応じた方法で授業改善に取り組むことができた。</p>
自立活動の充実	自立活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒一人一人に応じた目標設定や教材・教具、授業展開の工夫等、職員の自立活動に関する実践力を高めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 自立活動に関する理論的・実践的研修を計画し、全職員が知識・理解を深めるとともに、児童生徒一人一人の実態に基づいた具体的な目標や指導内容・方法を考え実践することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎講座を実施し、基本的な授業づくりや課題関連図の検討について学ぶことができるようにする。 目標設定シート作成日を設定し、チームで課題関連図や指導目標の検討を行う。 代表事例による研究授業や全職員による実践共有研修を実施し、事例から学んだり意見交換したりできるようにする。 	B <p>基礎講座では資料の内容をより詳細で具体的にした。今後、資料を動画形式に変え、いつでも誰でも受講できるようにする。代表事例による授業研究会や全職員の実践共有研修で、職員同士の学び合いを実現できた一方で、自立の授業について話す場が少なく、より日常的にPDCAを回しながら指導の改善を図るシステムを作る必要がある。</p>
授業のPDCAサイクルの充実と発展	授業のPDCAサイクルの充実と発展	<ul style="list-style-type: none"> 授業の進め方や評価の仕方等を学部内や学部間で話し合い、改善に向けてチームで取り組むことにより、授業の質を高めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部・グループでの話し合いを基に、授業のPDCA（計画・評価等）を効果的に運用しながら授業改善ができる。 事例研究を通して、職員同士で意見やアイデアを出し合い授業改善や専門性の向上につなげることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業づくりの日を活用し、研究部を中心に内容やスケジュールを管理しながら、授業について職員同士で話し合う時間を確実に設定する。 学部ごとに、事例研を行う教科や方法を検討し月に1回実施する。記録シートを全学部で共有し、他学部の授業や協議内容を知ることができるようにする。 	B <p>各学部で、授業に関する話し合いを定期的に行い、チームで授業計画や評価を行うことができた。</p> <p>年間を通して事例研を実施し、授業者の悩みをみんなで解決しながら授業改善につなげることができた。今後は、学部を超えて授業について意見交換したり同じ教科担当の職員同士で計画を協議したりする場を設定し縦のつながりを作</p>

						る事が課題である。
キャリア教育 (進路指導)	キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> 発達段階に応じた計画的なキャリア教育が実践できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部において、キャリアパスポートに記載する内容と活用方法を明確化し、活用を通して、児童生徒の自己理解、他者理解に加え、生活や人生設計に関する関心と意識を段階的に高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 全教職員が発達段階に応じたキャリア教育の重要性を認識しキャリアパスポートを活用し、組織的かつ継続的なキャリア教育を推進することで、児童生徒の関心と意欲を段階的に高める。 	B	各学部でキャリアパスポートを改善し、小学部での基礎作りから高等部の将来設計まで体制を整えた。児童生徒にとって使いやすさ、活用のしやすさ、小中高の一貫性などを狙って、統一フォーム（デジタル化）を検討していく。
	進路指導	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人が持てる力を十分に発揮し、積極的に自立・社会参加ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の発達段階に応じて、自己理解・職業理解を深める進路学習、体験学習を計画し、実践することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部で、地域の事業所見学や体験活動を積極的に実施する。また、現場実習を通じた就業体験の機会を設け、生徒が地域社会と深く関わり、実践的な学びを得られるようにする。 	B	キッズニア体験や事業所見学など、発達段階に応じた体験活動を実施し、働くことへの関心を深めることができた。児童生徒がより具体的な将来像を描けるよう、生活や人生設計への関心を段階的に高める取組を継続していく。
		<ul style="list-style-type: none"> アフターケアや同窓会組織の運営等、卒業後の就労や充実した生活を継続する体制を整備することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後3年以内の卒業生へ年1回、職員で状況把握（訪問等）を実施し、就労・生活課題に対し課題把握を行う。卒業生の交流を促進する集い（同窓会等）を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏期休業中などに職員で巡回訪問を行い、就労・生活課題を把握する。必要に応じ、関係機関と密に連携し解決を図る。 「かもと稲田まつり」では、卒業生による販売や茶話会等の交流活動を積極的に支援し、同窓会の繋がりを育む。 	B	進路先訪問計画を立て、卒業生の課題の早期発見と迅速な支援につなげる体制を整えた。今期の計画をベースに体制整備を進めていきたい。同窓会理事会の開催や「かもと稲田まつり」への参加、販売会の継続実施により、卒業生が安定して活動できる場を運営できた。販売会では卒業生自身で活動できる流れを構築していきたい。
生徒 (生活)指導	主体的な児童生徒会、委員会の活動を支える組織的な指導	<ul style="list-style-type: none"> 生活目標や人権教育の目標を踏まえた、児童生徒の主体的な取組ができるような指導ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 各委員会のこれまでの取組を振り返りながら、一人一人が活動できるアイデアを出し合ったり、一緒に取り組んだりすることを通してお互いを認め合い、主体 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が主体的に活動できるよう、自分の考えを表出しやすい環境をつくる。また教師は見守るだけでなく一緒に考えたり、ヒントを与えたりしながら取り組めるよう 	A	毎月の生活目標について児童生徒がポスター作成や呼びかけを行った。また、児童生徒会役員選挙では、学校生活をよりよく支えていく積極的な

			的な活動に繋げることができる。	にする。		目標を全校児童生徒に伝えることができた。
		<ul style="list-style-type: none"> 全学部の児童生徒が一体となって、意欲的にかかわり合える活動等が実施できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 「かもいなふれあいの日」では児童生徒同士がグループの児童生徒同士が仲間意識を持ち、協力して活動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学部を超えた児童生徒同士のかかわりが増えるよう、事前に職員間の打ち合わせの時間を設けたり、活動内容の工夫をしたりする。 高等部の生徒がグループの進行や運営を行う機会を設ける。 	B	<p>職員で事前に打ち合わせの時間を設けたことで役割や活動内容について見通しを持つことができた。今年度弁当の日を設け、昼食をともにしながら交流を深めることができた。一方、活動時間が長く、児童生徒の負担もあった。活動時間の見直しや内容の工夫をしていく必要がある。</p>
	生活規範や交通安全を守る指導	<ul style="list-style-type: none"> 生活規範を守ろうとする指導が実施できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活規範を守り、安全安心な学校生活を送れるよう、主体的に考え、行動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が中心として、生徒心得や生活ルールについて確認したり、見直しをしたりする機会を設ける。 生活指導の年間目標を基に児童生徒会から発信、啓発を行うようにする。 	B	<p>生徒心得や生活ルールについて確認したり、生徒心得について高等部で見直しを行う機会を設けたりすることができた。長期休業日前には、各学部で生活ルールの周知を設けたことで落ち着いた学校生活を送ることができた。スマートフォンの適切な使い方や友達、異性との節度のあるかかわり方については、引き続き生徒の実態に応じた授業や個別の指導を丁寧に行っていく必要がある。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> 交通ルールを守ろうとする指導が実施できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 交通ルールやマナーの大切さに気づき、安全に登下校ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 登下校や校外学習等において交通安全に関する指導を行うとともに、交通安全教室で体験的な学習を行う。 	B	<p>交通安全教室で体験的な活動を多く設けることができた。登下校時の安全指導を徹底する。</p>
人権教育の推進	命を大切にする心を育む指導	<ul style="list-style-type: none"> 命を大切にすることを育む授業づくりが実施できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分は大切な存在であるということが分かり、命を大切にする心を育む授業を系統的・計画的に行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の取組等を紹介し合いながら、自分の良さ、大切さに気づき、命を大切にしようという気持ちを育むことができるよう、授業を工夫する。 	B	<p>心のきずなを深める月間の取組や学部集会での誕生日会など、各学部の発達段階に応じて自他を大切にする心を育む授業を実施した。人権教育全体研修では、</p>

		<ul style="list-style-type: none"> 心のきずなを深める授業づくりと職員の意識を高める取組ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分も友だちも大切な存在であるということが分かる授業を系統的・計画的に行うことができる。 職員の人権意識を高める研修を計画的に実施することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 心のきずなを深める月間、人権集会を年間指導計画に沿って実施する。その上学習内容の系統性を学部毎に検証し、改善を図る。 講師招聘研修やオンデマンドを活用した校内研修の実施をしたり、校外研修の開催要項等を紹介したりすることで、年間を通じて幅広く研修を受けることができるようにする。 	B	<p>各学部の取組の様子を共有することができた。</p> <p>心のきずなを深める月間では、命を大切にすることを育む授業を各学部の発達段階に応じて実施した。人権集会では、各学部の人権学習の成果を他学部の児童生徒や職員と共有しながら、共同制作に取り組むことができた。1月に講師招聘研修を実施し、子どもたちの人権を大切にしたいという意識を高めることができた。</p>
	人権教育の理解を深める取組	<ul style="list-style-type: none"> 職員の人権感覚を育成する取組ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員間で取組や日頃の児童生徒との関わりを振り返ることで、人権教育に関する知的理解を深め、人権感覚を養うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 日頃の児童生徒との関わりを振り返るためのアンケートを年間2回実施し、結果を確認することで、職員一人一人の人権感覚を養う。 	B	<p>年2回のアンケートを通じ、全職員が自身の取組や人権意識を振り返る機会を持つことができた。その結果、各自が自身の強みや改善すべき点を明確に把握できるようになり、教職員全体としての人権感覚の向上につながった。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> 地域や保護者への理解啓発を図ることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域や保護者が様々な人権課題や本校における人権教育、児童生徒についての理解や関心を深め、人権感覚を養うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人権教育の授業の取組や人権作品をホームページで紹介したり、人権啓発に関する文書を案内したりする。 	B	<p>人権学習や人権集会、職員研修の様子等をホームページで発信することができた。また、すぐるを活用して保護者へ向けて研修案内を行うことができた。</p>
いじめの防止等	いじめの未然防止、早期発見の取組	<ul style="list-style-type: none"> いじめを許さない安全・安心で優しい学校づくりに児童生徒会を中心に、取り組むことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が主体的に学校の雰囲気や人間関係をより良くできる取組を発信、実践することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ防止の周知、スローガンの作成、校内放送や啓発ポスターを作成、掲示する。 学校生活や人間関係をより良くするアイデアを募り、全校集会等に生かすようにする。 	B	<p>いじめ防止に向けて各学部でスローガンの呼びかけやスローガン作成、掲示をすることができた。各学部でスローガンに込められた意味を共有し、いじめを許さない意識を高める機会となった。</p>

いじめの防止等		<ul style="list-style-type: none"> ・学校が、日常的な観察やアンケート実施等のいじめを未然に防ぐ取組を保護者と連携しながら行うことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的な児童生徒の様子を丁寧に観察したり、アンケート等を活用したりして児童生徒がSOSを出せる環境を整えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭と連絡帳や電話連絡等での情報共有を行い、小さな変化に気づくことができるようにする。 ・スクールサインや家庭チェックリスト、リーフレット等を定期的にすぐーるで配信し、家庭での様子を共有できるようにする。 	B	<p>連絡帳や電話連絡等を通して日常的に情報共有を行った。児童生徒の小さな変化にも気づくことができる体制づくりが定着した。</p> <p>家庭チェックリストをすぐーるで配信したことで、該当する事項がない家庭からも回答が寄せられた。回答率の向上に繋がった。</p>
	いじめ問題やその対応に関する理解を深める取組	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の理解を深めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・未然防止（信頼関係の構築、児童生徒の変化への気付き）と早期発見（兆候の捉え方、報告・連携方法）に関する行動指針を明確にし、共通理解を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年2回の職員研修を実施し、マニュアルや初期対応の方法を全職員で確認できるようにする。 ・担任、学部間での児童生徒の気になる様子について定期的に共有する時間を設ける。いじめ防止対策委員会での外部専門家の助言や内容について各学部周知する。 	B	<p>職員研修を通して、いじめ防止マニュアルや初期対応について全職員で共通理解を図ることができた。また担任・学部間での定期的な情報共有や、外部専門家の助言内容の周知により、児童生徒の小さな変化に早期に気づき、組織的に対応する体制づくりに繋がった。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・地域や保護者のいじめ問題に関する理解や学校の取組に関する理解を深めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のいじめ防止の取組の内容について定期的に情報発信を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA総会で取組の周知、ホームページやすぐーるの活用を通して、定期的に取組の発信を行うことで地域や保護者の方の理解を深められるようにする。 	B	<p>PTA総会で取組の周知ができた。ホームページやすぐーるの活用を通して、定期的に発信ができた。</p>
地域支援	センター的機能の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・地域における特別支援教育への理解を深めることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・通常学級での合理的配慮を含めた支援について理解を深めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インクルーシブ教育に向けた熊本県の取組について地区コーディネーター会議等で情報提供をする。 	A	<p>地区コーディネーター連絡会議と巡回相談を通して、高等学校のソーシャルスキルトレーニングの授業の取組にかかわることができた。他の学校にも紹介して広げていきたい。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関と連携をしながら地域支援にあたることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山鹿市以外の専門機関とも連携して地域支援にあたるができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山鹿市合理的配慮コーディネーターや各学校コーディネーターと連携し、就学時の適切な学びの場の選択における助言をする。 	B	<p>山鹿市児童発達支援センター療育相談員と連携して就学時の学びの場の選択における相談を32件実施。今後も小学校コーデ</p>

						<p>インターネットと連携して支援にあたる。</p> <p>また、病弱学級児童への対応で黒石原支援学校と連携するケースが3件あった。今後も在籍校への支援で連携していきたい。</p>
	一人一人の教育的ニーズの把握に基づいた支援	<ul style="list-style-type: none"> 校内支援の充実を図ることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 切れ目のない段階的な支援を実施し、必要に応じてSCやSSWを含めた関係機関と連携して支援を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> シェアタイム（学部内での指導・支援の協議）を各学部で年に1回以上行う。 年に2回程度校内支援委員会を実施し、関係機関につなげる必要のあるケースがないか検討する。 	B	<p>全ての学部でシェアタイムを実施し、児童生徒の指導・支援を充実させることができた。</p> <p>校内支援委員会を2回実施し、学部間での情報共有を密に図ることができた。</p> <p>また、支援会議を行う必要があるケースの有無について協議し、切れ目のない支援の充実を図ることができた。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ニーズに応じた巡回相談等ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任やコーディネーター等とのケース会議の中で、対象児童生徒の課題にせまるためのサポートをすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決シートを活用して、児童生徒の実態把握をし、支援について検討する。 	B	<p>巡回相談の際に、課題解決シートを使った支援の検討方法を紹介したり実際に使用して協議したりすることができた。</p> <p>巡回相談後も、課題解決シートを効果的に使用するケースも多くあった。</p>
	交流及び共同学習の一層の充実	<ul style="list-style-type: none"> 障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒が可能な限り同じ場で学ぶ取組ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部での学校間交流について、交流及び共同学習の目標を明確にしたうえで計画的に実施することができる。 また、居住地校交流を積極的に実施することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科等の年間計画に交流及び共同学習を位置付けるなど、目標を明確にして実施できるようにする。 また、交流及び共同学習の行い方（活動内容や実施方法）についても昨年度の反省を踏まえて具体的に計画する。 居住地校交流の目的等について積極的に保護者に知らせる。 	B	<p>各学部の年間指導計画に交流及び共同学習を位置づけ、全ての学部で学校間交流を行うことができた。</p> <p>実施校や実施時期、方法がある程度固まり、交流の基盤をつくることができた。</p> <p>居住地校交流の意義等について保護者に周知し、小学部で5件、中学部で1件実施することができた。</p>
地域連携（コミュニティ・スクールなど）	地域の方々や関係機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> 地域の方々や行政・福祉等の関係機関との連携を深め、チームと 	<ul style="list-style-type: none"> 本校の取組や課題等を地域や行政及び福祉等の関係機関の方々に発信する機会 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページや、やまがメイト等を活用して積極的に取組を周知する。 また、地域の回覧 		<p>ホームページを活用したコンスタントな取組の周知が定着しつつある。また、や</p>

地域 連携 (コミュニティ ・スクールな ど)		して学校の様々な課題解決に取り組むことができたか。	や授業で地域資源を活用した取組を昨年度よりも多く設定することができる。	板を利用した行事案内チラシ等の配付による周知も図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会を年3回実施し、協議会委員のアドバイスに現在の取組の充実及び新たな取組の推進を行う。 ・地元企業の説明会や進路(実習先)開拓を通して、地域企業にも積極的に本校の内容や取組を周知する。 	B	まがメイトで行事の事前周知ができた。 学校運営協議会において、本校の取組に対して前向きな評価をいただくとともに、さらなる発展を見据えたアドバイスもいただき、取組に反映させることができた。 地元企業の説明会や進路(実習先)開拓を通して積極的に本校の内容や取組を周知することができた。
	理解啓発 ・情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・地域への学校の取組等の啓発や情報発信を行うことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページや回覧板など、様々な方法で情報発信を行うことができる。 ・各種作品展に参加し、本校及び特別支援教育に関する理解啓発ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページに地域支援通信(コーディネーターの役割などを記載したもの)を掲載する。 ・回覧板等で学校の取り組みや学校行事の紹介をする。 ・各種作品展に参加し、本校の取組や生徒の学習成果について情報発信する。 	A	ホームページに地域支援通信を掲載し、職員や地域にコーディネーターの役割等を周知することができた。 ホームページでの発信に加え、学校新聞を2回発行し、地域に学校の取組を啓発することができた。 各種作品展等に参加し、児童生徒の美術作品や学習成果を広く知ってもらえるきっかけをつくることができた。 鹿本町文化祭では、動画での学校紹介も行い、地域の方に本校の活動について啓発することができた。

4 学校関係者評価

(1) 学校評価アンケート（保護者）結果

・昨年度「わからない」の回答率が高かった「いじめ防止に取り組み、いじめ等を発見したときは適切に対応している。」「特別支援教育や学校の教育活動について、地域住民から理解が得られるよう、学校は理解啓発に努めている」「長時間勤務の縮減等、教職員の働き方改革に取り組んでいる。」の3項目について、取組の充実や周知を図った結果、地域への理解啓発は「わからない」の回答率が減少し、いじめ対応については、肯定的な評価が高くなった。働き方改革についての回答率は昨年度とほぼ同じであった。

・昨年度同様、全項目「A：そう思う」B「ややそう思う」を合わせた割合は高いが、その中でも昨年度と比較して「A：そう思う」の割合が高くなった。

(2) 学校評価アンケート（職員）結果

昨年度「特別支援教育に関する専門的な知識や指導力を身に付けている」としていた項目について、今年度は専門性を高めようとする姿勢を評価することとし、「特別支援教育に関する指導力向上を目指して授業実践に取り組んでいる。」と変更した結果、「A：そう思う」B「ややそう思う」を合わせた割合は97%であった。

(3) 学校運営協議会における意見

・保護者アンケート結果の数値や学校に感謝している等の意見があり、高い評価を得ていることが伺える。

・授業力向上の取組に対して、委員も授業参観により授業の様子を見れば、より具体的な気づきの共有や助言ができるのではないかと。

・チームで授業づくりを行ったり、評価を行ったりすることは大変意義がある。チームで児童生徒に対する実態把握もじっくり行ってほしい。

・自立活動の充実も含めて、本校の専門性を地域の小中学校の特別支援教育の充実のために、今後も発信・助言してほしい。

・職員アンケートにある「子どもは、健康で安全な学校生活を送っている。」について、「子どもが健康で安全な学校生活を送れるよう指導している。」と変更すれば、職員が指導できているか意識しながら回答できるのではないかと。

・教職員の熱意ある取組が成果を上げている一方で、業務に係る負担が大きくなっているのではないかと懸念する。教職員の負担軽減に引き続き取り組んでほしい。

5 総合評価

(1) 命と人権を守る教育環境づくり

安全点検及び危機管理研修、緊急対応訓練等を行うとともに、児童生徒には、事前・事後の安全教育を含め、各校舎6回以上の危機管理訓練を実施した。また、訓練後にはアンケートを実施し、結果を基にマニュアル改定を行い、危機管理体制の構築を図った。

「道徳」の授業の充実、他学部も含めた児童生徒同士のかかわりを大切にしたい人権集会、児童生徒によるいじめ防止のスローガンの作成・呼びかけ等の取組を行い、相手を思いやる姿を見ることができた。

(2) 学ぶ楽しさ、わかる喜びを実感できる授業づくり

「授業づくりの日」を活用して学部毎にチームでPDCAサイクルを回しながら、授業計画や評価等を行い、授業改善を図った。また、自立活動の授業研究会や全教職員での実践共有研修では、事例を基に学びあい、自立活動の充実につなげることができた。「ノー会議デー」の運用により、授業計画や教材作成の時間を確保することができ、持続可能な授業づくりの体制の定着を図った。

(3) 地域に根差したキャリア教育と地域と協働した教育活動の推進

各学部の発達段階を踏まえたキャリアパスポートの改善を図り、就労体験や事業所見学等、系統的なキャリア教育を行った。作業学習等で身に付けた力を生かして近隣施設で活動を行い、地域の方と関わりながら「地域で働く・暮らす」ことを支える取組を推進した。

また、新たな地域資源を開拓できたことで、児童生徒にとって新たな学びへと発展させることができた。交流及び共同学習では、小・中・高等学校や地域の方と計画的に実施することができ、その中で児童生徒同士がかかわり合う姿が多く見られた。

(4) センターの機能を生かした地域の特別支援教育の充実

巡回相談、各校の特別支援教育に関する校内研修の講師等を通して、山鹿市内の幼・小・中・高等学校におけるセンター的機能を生かすことができた。また、今年度は、本校の授業参観やコーディネーターの助言により、高等学校のソーシャルスキルトレーニングの授業充実に向けて支援を行うことができた。今後とも個別の支援や研修に加え、授業づくりにおいても特別支援教育の充実につなげていく必要がある。

(5) 教職員のウェルビーイングを推進する職場づくり

「かも稲Workルール」を全職員が毎月振り返る機会を設けたり、外部講師を招聘してグループワークを取り入れた校内研修を実施したりして、風通しが良く、互いに高め合える職場づくりに取り組んだ。また、本校ワークガイドのDX化、毎週水曜日の「ノー会議デー」の定着を図り、教職員のウェルビーイングの推進に取り組んだ。

6 次年度への課題・改善方策

(1) 職員の専門性の向上

「授業づくりの日」において、チームで指導方法等を協議し、学び合いながら継続的な授業改善を行うとともに小・中・高等部間の学びの連続性・系統性の整理を行う必要がある。なお、自立活動の充実について、スキルアップ研修の代表事例の検討・共有により知識・理解を深めたが、来年度はさらに自身の事例の検証を行い改善を図るとともに、様々な事例を共有し、実践力を高めていきたい。また、校外研修へ積極的に参加したり、外部講師から指導・助言をいただいたうえで学び合うことができる校内研修を設定したりして、全職員の特別支援教育に関する専門性や指導力の向上を図る。

(2) 地域への理解啓発

次年度も地域の小・中・高等学校との交流及び共同学習の機会を計画的に位置づけ、推進を図っていく。その際、より交流が深まるよう、教職員においても打ち合わせで目的や活動内容の共通理解を図ったり、研修等で意見交換を行ったりしたうえで、お互いに教育効果の得られる質の高い交流及び共同学習を展開したい。また、学校行事やオープンスクール、作品展示、作業製品販売等について事前の周知・事後の広報をさらに充実させ、地域への理解啓発を行っていく。

併せて、学校公開等を通して、自立活動を含む本校の教育実践や特別支援教育に関する情報を積極的に発信し、地域の特別支援教育の充実を図っていく。

(3) 児童生徒、保護者、職員の小学部段階からの進路選択・進路決定に関する意識の高揚

小学部低学年から卒業後の生活に関連する発達段階に応じた体験活動等に計画的に取り組み、卒業後の生活に向けた意識を早期から持てるようにする。次年度は全学部のキャリアパスポートの系統性を持たせるとともに、電子化を検討し、児童生徒の得意なことや成長の変化に気付き、生活や人生設計に関する関心と意欲を高めていけるように取り組む。

また、全学部の保護者に対して、山鹿市で行われる進路に関する説明会や講演会等の情報を積極的に提供したり、校内で進路研修を企画したりして、小学部段階から卒業後の生活へのイメージを保護者、職員が持てるよう取り組んでいく。

また、高等部生徒の現場実習先の確保、経験できる職種の拡大について、現場実習の目的や方法等を掲載したリーフレットの活用や企業との意見交換を通して積極的に職場開拓を行い、一般企業等からの理解と協力が得られるように組織的に取り組んでいく。

(4) 働き方改革の推進

今年度は、全職員による業務改善アンケートを基に業務改善内容を検討し、業務の精選・校務のDX化を含めた効率化に向けて取り組んだ。来年度は年度当初から業務改善内容の実施・定着を図るとともに、校務分掌内の役割分担変更による業務の平準化や業務のスケジュール管理等を行い、更なる時間外勤務時間の短縮を図る必要がある。また、衛生委員会で産業医からの助言を生かしながら、職員の健康管理について協議を行っているところであり、次年度も衛生委員会を十分に機能させ、業務の平準化や心身の健康の保持増進を図っていく。